

『ルイ大王の世紀』における比喩(1)

末松, 壽
九州大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1183>

出版情報 : 文學研究. 99, pp.17-44, 2002-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :



『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

末 松 壽

序 論

若干の文学史研究者たちを例外とすれば、誰が今日シャルル・ペローの『新旧対比』を読むであろうか。ペローが忘れ去られたわけではない。『昔話』は依然として最も多く読まれる17世紀フランスの書物の一つであって、一般読者を対象とする様々の形での出版が見られる。だが『新旧対比』はそうではない。全4巻5篇の対話から成り、小型(in-12°)本とはいえ付録テキストを除いてざっと1,400ページにおよぶ膨大さも理由の一つであるが¹⁾。まして、この対話篇の起草の機会となり、国王の病の回復を祝う1687年1月27日のアカデミー・フランセーズの席上でラヴォ神父(le P. Lavau)によって朗読された『ルイ大王の世紀』²⁾について何を言おうか。所詮、この詩は文学史上の小さなエピソードにすぎない。あまつさえそれは君主制を、更にはルイ十四世の個人崇拜を臆面もなく表明している……文学史が言及せざるを得ないとしても、それは数行でこと足りる。実際この朗読が開始を告げた論争自体、大古典時代と啓蒙の世紀との狭間に押しこめられ、二つの時期を辛うじて分節する過渡期の偶発事ではなかったか。それもアカデミーの人間関係に帰せられる内紛の現れに過ぎなかったのではないか³⁾。論争において産出された文書の中でも、ペローの二作品は、事件レヴェルでの重要性はともかくとして、フォントネルの『新旧余談』⁴⁾を前にすれば、少なくとも哲学的射程においてはいささか影がうすいかと思われる。

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

けれども、我々はペローの作品は読まれるに値する作品であると考え。というのも作品の文脈を構成するこの論争自体が、二三の理由によって文学史および思想史上で最大の重要性をもつ事件の一つであったと思われるからである。

まず、アカデミーをその特権的な場として展開を見た論争には実に多くの論客たちが巻きこまれた。大古典作家たち、ボワロオ、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌ、ラ・ブリュイエール、それにペローやフォントネルを始めとする様々の分野の作家、詩人、科学思想家、宗教作家……である。

発言者の多様さと相関的に論争の主題が極めて多岐にわたること。文芸に限っても、ギリシア・ローマのそれに近代のそれを比較するという端的な問題の他に、ラテン語とフランス語の優劣が問われた。さらに、古代派が話題を詩（叙事詩、戯曲）および雄弁、すなわち今日いわゆる「文学」に閉じ籠もり——ロンギヌス偽書を支えに崇高美の理論を構築していったことは特筆に値するとはいえ⁵⁾——、しばしば守勢にまわり、なおかつ敵対者たちによる古典文の引用の仕方や翻訳の是非をあげつらい、あるいは個人的な詩作の立場を表明し、アテナイ人たちの審美眼と近代の観客のそれとの一致を喜び……、とかくいささか近視眼的な視野しか持たなかったのに対して、大胆な近代派は一挙に展望を拡大し、文学はいうまでもなく戦争術、哲学、自然科学、生理学、絵画、彫刻、音楽、建築、造園術をとりあげる。以上は『ルイ大王の世紀』があつかう話題であるが、続く『新旧対比』は、これらを実例を通して詳細に検討することはもちろんとして、さらに天文学、地理学、航海術、医学なども俎上にのせる⁶⁾。実際1688年の第一巻に始まり1697年の第四巻（第5対話）で完結する膨大な対話篇（正確には鼎談）は文化のいわば「百科」にわたる諸領域を踏破していて、これをもって17世紀フランスが産出した批評の頂点（sommet）ではないとしても、少なくとも一つの集大成（somme）と見なすことはできるのである。

特殊的に注目すべきは、新派が諸分野における近代の古代に対する優越の

観察・確認——兎戯に類する軽薄な話題と見えるかもしれないが、実際はこれは文化史学の企てである——から出発して、全人類を巻き込むことになるいくつかの強大な学説ないし確信、もしくはイデオロギーに通底し、おそらくそれらの基盤となるところの一つの観念を練りあげたという事実である。彼らはおそらく西欧で初めて集团的に、集中的に、体系的に「進歩の理論」(ペギー)ないし「進歩の観念」(グルニエ)を提唱するのである⁷⁾。

最後に事件が長期にわたる事実。『ルイ大王の世紀』の朗読に始まる論争は、ボワロオ／ペロー双方の畏怖する友人であった大アルノーやボスュエらの勧告にしたがって、両者の間に「公式に」は和解が成立する(1694年8月30日)⁸⁾。けれども両者とも関連文書の出版を止めるわけではない⁹⁾。さらに1713-1716年には、別の登場人物が詩、とりわけホメロスをめぐる論争を蒸し返すことになる¹⁰⁾。論争はこうして第一次・第二次と合わせてざっと30年におよぶ。

いや、論争はもっと広汎な展望に位置づける必要がある。実際、歴史上のあらゆる事件について言えることだが、その開始点と終結点とを画定することは困難である。文学史家たちによれば、新旧論争の胎動とも呼ぶべきものはるか以前に始まっている。ローマ時代にまで遡及しないとすれば、たとえば、パスカル、デカルト、ベイコンが言及されている¹¹⁾。我々の解釈によれば、この論争は文芸復興とそれに続く(教育を始めとする)文化の営みに一つの決着をつける事件であったと思われる。古代派とはいわば遅れて来たルネッサンス人たちであった。他方、18世紀以降の西欧思想はどうであったか。近代派が断定した進歩観は、これを再肯定するにせよ破棄するにせよ、あるいは批判的に更に精緻な思想を練りあげるにせよ、すぐに引き継がれる。まずヴォルテールの『ルイ十四世の世紀』(1752年)によって。もちろん『百科全書』の大規模な企てによって。当時知られ得た古今東西の知識・技術を集大成しつつ記述するとは、全体として人類の進歩を確認することでないとしたら何であっただろうか。コンドルセ¹²⁾ やとりわけルソーによって。更に19

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

世紀には、この観念にいわば戴冠する大学説が現れる。進化論であり、「科学の将来」をめぐる展望であり¹³⁾、そしてもちろんマルクス主義である。

多かれ少なかれ未知の病気や事故、災害が発生する度ごとに、またそれらが予感されるために、安易な進歩への信頼あるいは進歩イデオロギーは、科学技術のいわゆる「行き過ぎ」に対してと同様に反省とか警告、問い直しの対象となっている。また様々の社会・政治・宗教運動も組織されている。しかし進歩思想の側からは、否、進歩は未だ途上にあって未熟だからそれらは生ずるのであって、諸々の困難は更なる完成によって遅かれ早かれ制御できる、という反論がなされ得る。実際ペローは「決して満足することを知らない技芸」¹⁴⁾を語っている。他方、少なくとも生活の諸分野における具体的な利便性——より多く、より早く、より容易に、より安全に、そしてより早く——を予想ないし期待していない者はいるだろうか。技術は、これまた進歩の一つに他ならない経済的利潤の拡大とともに、進歩を指導理念として世界の有り方を変えつつある。17世紀末に提起された命題はこうして今なお、そしてこれからも恐らく、我々を否応なしに規定していくと思われるのである。

以上、新旧論争の意義、従ってまたペローの批評的著作のもち得る興味を思いおこした。

筆者がここで試みるのは、コーパスを『ルイ大王の世紀』にかぎって、文化諸分野とりわけ文芸における進歩を論証しあるいは説得する著者の手法を検討することである。というのもペローは、近代の優越を語るに際して、極めて頻繁に或る一つの手法に訴えるからである。それは「たとえ」、とりわけ類比 (analogie) の援用である。しかし検討に入るまえにこの作品の簡単な紹介をしておこう。

I

『ルイ大王の世紀』——韻文による演説

これは12音綴つまりアレクサンドランによる532行の韻文作品で、もちろん脚韻を踏んでいる。f. f. m. m. f. f. m. m. という具合に女性韻と男性韻とが2行ごとに反復される「平韻」である。周知のとおり平韻をもつアレクサンドランは、文学史上、最も真面目で高尚とされた種類の文芸ジャンル（悲劇や叙事詩、そして喜劇）において使用された。

作品は明確な構成をもっていて、論点を画定しそれらの配置をしめすことは容易である。まず序文ともいふべき最初の数行が問題を提起し、主旨を明らかにする。書き出しを読もう。

La belle Antiquité fut toujours venerable,
Mais je ne crus jamais qu'elle fust adorable.
Je voy les Anciens, sans plier les genoux,
Ils sont grands, il est vray, mais hommes comme nous :
Et l'on peut comparer sans craindre d'estre injuste,
Le Siecle de Louis au beau Siecle d'Auguste. (v. 1-6)

美しい古代は常に尊かったけれども、
私はそれが崇拜されるべきだと思ったことはない。
古代人を仰ぎみるために跪くことはない。
なるほど彼らは偉い。だが我らと同じ人間だ。
比較したとて不当である恐れはない
アウグストゥスの見事な時代とルイの時代とを。

すなわちルイ十四世¹⁵⁾の時代（近代）と古代ギリシア・ローマ（ここではその絶頂期の一つであるアウグストゥスの時代が代表している）との比較、これが作品の主題である。続いて作品は様々の分野における新旧の対比に入り、近代の優越を指摘する。その後、一般的な進歩に関する考察を経て、最

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

後にルイ王への讃辞でもって結語となる。作品が単純で堅固な構成をもつということは、1 ページに1回ないし2回の改行が見られる事実によっても明らかである。段落とは一般に散文に特徴的な書記法上の習慣であることを考えれば¹⁶⁾、これはまさに韻文形式をまとった演説 (discours) に他ならないことが分かるだろう。そこでは教え、証明もしくは説得することが重要なのである。

ロラン・バルトは『零度のエクリテュール』において、古典時代の詩と散文とは「本質においてではなく量において」異なっていたにすぎないと指摘している。「もし私が必要最小限の言説、つまり思惟の最も経済的な伝達手段を散文と呼び、他方、言語活動の特殊な、不必要だが装飾的な属性、例えば韻律法 (mètre)、脚韻 (rime) あるいはイマージュの仕来り (rituel des images) を、a, b, c と呼ぶならば¹⁷⁾、二重の方程式が得られるという。すなわち、詩 = 散文 + a + b + c / 散文 = 詩 - a - b - c、である。そしてこれを次のように説明する。

社会的な機会におうじて話し方は様々に配合される。ここには散文もしくは雄弁が、そこには詩もしくはプレシオジテが、すなわち一連の社交的仕来りとしての表現が見られる。しかし至るところ唯一の言語活動があって、これは精神の永遠の諸範疇を反映する。古典詩は散文の装飾的なヴァリエーションとしてのみ、技 (art) (つまり技術 technique) の果実としてのみ感じられていたにすぎず、決して異なる言語活動としてもしくは特殊な感受性の所産として感じられていたのではない。(p. 161)

すなわち古典時代における言語活動 (langage) の単一性、その表現における散文と詩との量的な差異化の指摘である。

しかしこの記述は果たして明晰であるだろうか。理論家の主要な関心は、とりわけランボーから始まる近代詩のエクリテュールの存在を主張しその基本的な性格を特徴づけることにあって——章のタイトル「詩的エクリテュー

ルは存在するか」がそれを証言する——、古典詩は近代詩の特徴をその差異において引き立たせる比較の対象として立てられている趣がある、と我々には思われる。バルトが古典時代の文学言語をいわば純粋な原型に還元はしないとしても、少なくともそれへの参照によって説明する所以である。実際、名称の定義にいう「散文」とは観念的な措定にすぎず、恐らく特殊な言語活動、軍事上の命令、数学の言語、機械操作のマニュアルなどを別にすれば、かつてどこにも存在したことはないし、まして古典時代が実現したのでもなく（バルトもそれを認めている。p. 163）、理念としていたわけでもない。実際の古典的散文には、韻律法すなわち音綴数の規定は定義上無いとしても、そのいわば薄められた代補としての音調（prosodie）の規制が厳然として支配していたことは疑えない。それはこの散文が本質的に「口頭による伝達のための」（p. 165）言語であった事実に相関する。そして口頭性こそは、韻文・散文を問わず古典的文学言語の最大の特徴の一つであった。

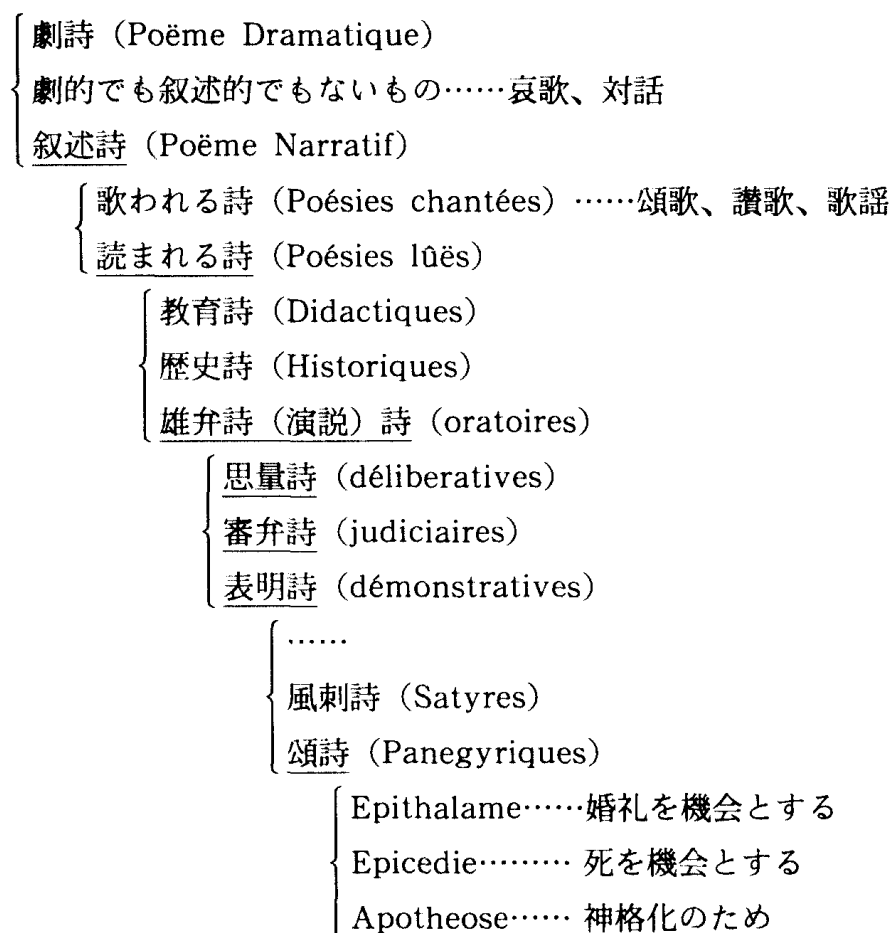
もう一つの問題がある。それは特殊的に韻文の属性とされる「イマージュの仕来り」である。なるほどそれは韻文には頻出する。それは儀式のように社会性を帯びた一つの拘束であったと見える。けれども、イマージュは韻文のみの属性であったであろうか。ここでも純粋の数学言語をのぞけば、それは至るところで、そのまま弱音化することなく確認される現象ではなかったか。神学はもちろん、文法学や論理学それに形而上学の言説も例外ではない¹⁸⁾。そして最後に本質的な疑問は、古典時代においてイマージュは、思惟自体にとってはもちろんその「最も経済的な伝達手段」にとって、「不必要なしかし装飾的な」属性にすぎなかったのであろうか。

ともあれ、詩が「散文のヴァリエーション」であったという定義は、とりわけ「詩」という副題をもつ『ルイ大王の世紀』には完全にあてはまる。このことは、修辞学とともに当時の「文学理論」を構成していた詩法を参照することによって確認することができる。

演劇活動への宗教および道德の観点からの厳しい非難を別にすれば、ボワ

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

ロオに共通する保守性を、場合によってはもっと懐古的な傾向をしめすラミ師の『詩法に関する新たな考察』を見よう。理論家の素描する詩ジャンルのシステムは以下の一覧表に纏めることができる¹⁹⁾。(我々の解釈にしたがって、ペローの作品の帰属する範疇には下線をほどこす)



大から小にいたる多くの分割によって体系は形成されている。若干の注釈が必要であろう。

1) 第一の分割はもちろんアリストテレスの様態による模倣技芸の区分を踏襲している。ジュネット以来有名な術語では《mimésis》/《diégésis》である²⁰⁾。後者を代表するのは叙事詩である。一見奇妙なことにこれは以下の区分のどこにも端的な位置を見出さないが、それはこのジャンルがラミにとっ

て「ほとんどあらゆる作品を包括する」(p. 209) という理由による。言い換えれば、これはウェルギリウスの作品が範を示したように全てを分有ないし総合する特権的な形式なのである。もっとも《narratif》なる術語は、以下の諸区分に鑑みて、端的な「物語」よりは広い意味をもつと理解しなければならない。登場人物の発言によって規定される「劇詩」とは異なり、作者が「語る」ないし「述べる」詩という意味である。なお著者は『詩学』の設ける二大区分にいわば中間的なジャンルを導入している。

- 2) 次いで叙述詩は、再び産出および享受の様態を基準として二分される。ただし歌う／読むのうち、後者は、現代人が誤解して取りがちな黙読ではなく、とりわけ朗読とそれに相関する聴取、すなわち口頭的消費を意味していたことに注意しよう。『ルイ大王の世紀』もまた朗読された。
- 3) 「読まれる詩」を対象とする第三の分割からは、様態に代わって内容の差異が識別の基準となる。教育詩には「ある学問を教える」(p. 202) という説明が、歴史詩には具体例が与えられるが、《Poësies Oratoires》はこれを更に分かつ区分において説明される。
- 4) 続く区分についてはやや詳細にテキストを読む必要があるだろう。ラミは書いている。

修辞学者たちは演説を三つのジャンルに分けている。第一は思量ジャンルであって、そこでは何らかの命題について思量するのである。第二は審弁ジャンルであって、法廷において誰かを非難しもしくは弁護することが問題となる。第三は表明ジャンルであって、誰かの美德ないし悪徳を明らかにするために用いられる (p. 203)²¹⁾。

修辞学の設ける三大部門のごく大まかな概説である。だがそれが詩にとって何だというのか。疑問はすぐに解消する。ラミは続いて「これら三つのジャンルにおいて詩をつくることができる」(p. 203) と書いているのである。詩法と修辞学とが連帯して時代の文芸理論を構成していた事実を証言する件である。ところで、すでにリストが示す散文による演説ジャンルに対応する韻

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

文学作品の可能性を、著者は明示的に主張して「韻文に直せないような散文による演説は存在しない」(p. 205)とも書いている。つまり「社交的な仕来り」が含意する一種の「尊厳」を帯びるか否かを別にすれば、二つの形式は相互に「ヴァリエーション」を構成し、相互に「翻訳」可能なのである。

『ルイ大王の世紀』が雄弁詩の三つのジャンルの各々に属し得ると我々が解釈する所以は、ラミによるそれぞれの規定は、必要な字句の変更を加えるならば完全に作品にあてはまるという理由である。この詩は「何らかの命題について思量し」「法廷（アカデミー）において誰か（ルイ王の世紀）を弁護し」、最後に「誰か（ルイ王の時代）の美德（美点）を明らかにするために用いられている」からである。その上、婚姻や神格化と並び得る「回復祝い」を動機とするルイ十四世への一種の頌詩であると見ることもできるであろう。更には、時に古代（派）に対する風刺の趣をおびることもある。

最後に、ラミの言う翻訳可能性とは逆方向の変換の可能性についての証言を我々の著書自身に求めよう。それはまた作品の起源をも明かすであろう。「ラシーヌ氏は私を祝福しこれを大いに褒めてくれた」が、それは作品を「純粹な知性の戯れ」として受け取る——辛辣な皮肉——限りにおいてであった、とペローはいう。そしてこう書いている。

私は真面目に語ったのに人々が信じなかった、もしくは少なくとも信じないふりをしたことを私は残念に思った。それゆえ私は韻文で言ったことを散文で真面目に言い、その点についての私の真の考えを疑わせないようなやり方で述べる決意をした。これが私の『対比』4巻の原因であり起源であった²²⁾。

韻文に何らかの危険があるとすれば、それは技の駆使を要請する社交的な品位もしくは方向づけ、つまり限定は目を眩ませかねないという事情である。これは、ラシーヌの不誠実な讃辞からおそらくペローが得た教訓ではなかったであろうか。ともあれしかし著者は韻文においても「真面目に語った」のである。

要するに、この作品は何を言うかが言い方に劣らず重要性をもつジャンルに属するのであり、じっさい論旨は明確な構成と展開をもつのである。作品の検討にはいろいろ。

II

比喩の例

「たとえ」とりわけ「類比」と我々は述べたのだが、それはアキノのトマスで周知の「存在類比」(analogia entis)とは異なるし、またフーコーが16世紀を特徴づける神秘学的な「知」として示した「類似」(similitude)の様態にしてかつそれを支える《analogie》とも同じではない²³⁾。それはどのようなものであるか。まず例をあげよう。

1. 古代の詩人たちはなぜ高く評価されるのか

Ce n'est qu'avec le Tems que leur nom s'accroissant,
Et toujours plus fameux d'âge en âge passant,
A la fin s'est acquis cette gloire éclatante,
Qui de tant de degrez a passé leur attente. (v. 163-166)

彼らの名声はひとえに時間とともに増してゆき、
時代から時代にかけて常により高名になり、
ついにはこの輝く栄誉を獲得した。
それは彼らの期待をこえて格段の高みにたった。

もちろん、文学史や文学社会学の主題の一つ、作家の「生き残り」あるいは「浮沈」の問題である。ペローは、作家の名声は時間とともに増大するという命題を直ちにある自然現象に比べる。つまり文化現象 (Téchnè) を自然界 (Phýsis) 起源の比喩で説明するのである。孤立した二項の関係であるな

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

らば、それはありきたりの比喩にすぎまい。しかしペローで現れるのは単なる二項関係ではなく、しかも類似の比較が頻出する理由によって、これはペローに独特の方法であることが分かる。比喩は《Tel》によって導入される。

Tel à flots épanclus un fleuve impetueux,
En abordant la mer coule majestueux,
Qui sortant de son roc sur l'herbe de ses rives,
Y rouloit inconnu ses ondes fugitives. (v. 167-170)

あたかも波を広げて荒れる大河は
海にちかづけば厳かに流れるように。
それは岩から両岸の草へと出てゆく時には
束の間の波紋を人知れず流していたのに。

現代において大詩人の盛名をほしいままにしているメナンドロス、ウェルギリウス、オウィディウスは生存中には評価されていなかった、というのである。あたかも海にそそぐ大河も最初は小さな泉にすぎなかったように。湧き水を形容する《inconnu》は基本的には作家、文化現象にあてられる語である。自然現象の記述において詩人は文化現象に固有の語を用いているのである。水流を修飾する三つの語《impetueux》《majestueux》《fugitives》が行末において脚韻を構成しているが、これらについても転義を語ることができる。《majestueux》は *Nómos* 起源の隠喩というべきであろう。ただ我々が注目するのは、このような個々の単語のレヴェルにおける単発的な転義ではない。それならば、韻文であれ散文であれ、じっさい至るところでほとんど無限に見られるのであって、枚挙に暇はなく、ペローに特有というわけでもない。我々はまた、分類のために利用するとはいえ隠喩の起源を問うわけでもない。主題を構成する文化現象と《Tel》が導入する自然現象との全体的な関係を問うのである。我々の関心は名辞や繫辞の使用法にではなく、命題構成のレヴェル、あるいは命題と命題との関係のレヴェルにある。二つの命題があらわす事行の間に厳密な対応が確立されていることに注目しよう。それは見取り図に表すこと

ができる。

(時間の経過)

知られざる作家たち (古代) —————→ (現代) 大作家

(時間の経過・空間移動)

泉 —————→ (河口) 大河

類比は二組の二項関係の間関係なのである。

ところで同じ論法は近代にも適用される。ペローは、コルネイユ、モリエール、マレルブ、ロトルーは妥当だとしても、今日ではむしろ知名度の低さで驚かせかねない文士たちを含む12人の作家たち (ほぼ半数はアカデミーのとりわけ初代会員)²⁴⁾ を列挙する。そして言う。彼らは、

Donc quel haut rang d'honneur ne devront point tenir
Dans les fastes sacrez des Siecles avenir [sic] (v. 171-172)

来るべき時代の聖なる年代記において
どれほど名誉ある高い地位を占めないことがあろうか。

……dont les écrits superbes; [sic]
En sortant de leur veine & dez qu'ils furent nez,
D'un laurier immortel se virent couronnez. (v. 174-176)

……その素晴らしい作品は
彼らの靈感から生まれいつるや否や
不滅の月桂冠を授けられた。

ましていわんや将来においてをや、という訳である。そして最後に再びこう
推断する。

De ces rares Auteurs, au Temple de memoire,
On ne peut concevoir quelle sera la gloire. (v. 189-190)
これら類稀な作家たちの栄誉が記憶の神殿において

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

いかなるものとなるかは想像することもできない。

比喩を軸として、古代詩人の近代における名声の増大の事実と近代詩人の将来におけるその予想とが三幅対を構成している。後者はもう一つの事例として上の見取り図に記載することができる。この思考方法はペローにとって一つの鑄型となる。じっさい彼は絵画や彫刻についてもパラレルな類推を（もちろん未来時制で）行うのである²⁵⁾。

2. 現代の雄弁は古代のそれを凌駕し得ること

キケロやデモステネスが国の有り方を左右する高度に政治的な主題（君主制の是非、戦争すべきか否か）を論じていたのに対して、現代では弁論家たちは、自明の事柄の証明遊びでなければ所有地の一部の帰属とか犯罪者の弁護といった「卑しい問題」(v. 86)にかまけている。けれども、もし彼らがその力量に相応しい主題を得たならば、とペローはいう²⁶⁾、「群れなす民」(v. 89)、「熱狂する下層民」(v. 98)が馳せ参じ猛りたつであろう。「ちょうど (Ainsi)」——比喩の開始である——、

Ainsi quand sous l'effort des Autans irritez,
Les paisibles Estangs sont à peine agitez,
les moindres Aquilons sur les plaines salées,
Elevent jusqu'aux Cieux les vagues ébranlées. (v. 99-102)

ちょうど苛立つ南風の努力の下で
穏やかな池はほとんど動くことはないのに、
海原を吹く取るに足りぬ北風によって
波は揺さぶられ天にも昇るように。

自然界への参照は、近代において雄弁が陥っている状態と他方の仮定される雄弁との比較のために成されている。烈しい南風は大演説家を、それが大して動かすことのない池は法廷を、他方北風と海原とは仮定された演説家およ

び聴衆を表象する。この想定において、近代の雄弁は、たとえ大演説家のそれだけでなくとも古代の雄弁に引けをとることはないであろう、というのである。ここでも自然の事行を記述しながら、本来的には *Téchnē* に属する語が多用されている。《effort》(努力)、《irritez》(苛立つ)、《paisibles》(穏やかな) である。更に《agitez》(動く) や《ébranlées》(揺さぶられ) のように、固有の意味と転義との振り分けが困難なほど物と人との無差別に使用される語も現れている。転義はそれほど言語活動に浸透しているのである²⁷⁾。

3. 音楽の効果と星空の効果

「途方もなく空想的な」(v. 332) ギリシアは、音楽の与える効果についてオルペウスやアンピオンに関する伝説を伝えているが、それは寓話にすぎない。ギリシア音楽は様々の情念をたきたてたり鎮めたりしたというが、「この神々しい麗しの術」(v. 369) は耳の魅惑や情念への効果のみならず、もっと高度の作用をもつ、とペローは主張する。

Il va, passant plus loin, par sa beauté suprême,
Au plus haut de l'esprit charmer la raison même (v. 373-374)
それはもっと遠くまで行き、至上の美によって
精神の最上部において理性そのものを魅惑する。

感覚、情念、理性は認識論的な序列を成していて、音楽はその最上部にまで達するという。ところで技艺に属する現象は再び自然レヴェルの、視覚的なイメージに翻訳されるであろう。近代派にとっては逆説的であるが、ピタゴラス的な比喩が現れる。夜空に輝く天体の景観をながめる者は、確かに喜び、感嘆、畏怖に満たされる。しかし、とペローは続ける。星々 (feux) の定まった運行 (courses mesurées)、様相 (aspects)、方位角 (declinaisons)、落下 (chûte) や回帰 (retour) が知られているとしたら (v. 389-392) ——すなわち望遠鏡の技術とともに天文学の発達した近代の状況である

—、
Combien adore-t' il la Sagesse infinie,
Qui de cette nombreuse & celeste harmonie,
D'un ordre compassé jusqu'aux moindres momens ? [sic]
Regle les grands accords & les grands mouvemens ? (v. 393-396)
どれほど人は無限の叡智を崇拝するであろうか。
このあまたの妙なる調和で、
僅かの瞬間にいたるまで正確に案配された秩序で、
大いなる調和と大いなる運動を規則づける叡智を。

天体の秩序ある動きを《harmonie》とか《accords》という語で表現しているが、もちろんこれらは音楽の術語でもあって、とりわけいくつかのパート (v. 401の原注) が分担する複数音の出会いによって実現される和音を意味する。対位法を知らなかった古人は、あたかも天体についても感覚や感動の段階に止まらざるを得なかったように、音楽のこの上ない喜びを知らなかったというのである。感覚から感動へ、感動から知識へと上昇することによって、視覚的イマージュの段階は超えられる。同時に、Phýsis レヴェルの比較語は Téchnēのそれに変わるのである。

4. ギリシア音楽に関する不可思議な伝説

ギリシア音楽についてはもう一つの譬えがある。不可思議な効果に関する伝説は「自分の生み出したものに心酔する」偏った愛に由来するという説明である。そこでも《Ainsi》による導入が見られる。

Ainsi lors qu'un enfant dont la langue s'essaye,
Commence à prononcer, fait du bruit & begaye,
La mere qui le tient a ses sens plus charmez
De trois ou quatre mots qu'à peine il a formez,
Que de tous les discours pleins d'art & de science,
Que declame en public la plus haute éloquence. (v. 409-414)

あたかも舌を試してみる幼児が
発音しはじめ、音を出し、口籠もる時、
子を抱く母親の五感は子の辛うじて形成した
三つ四つの語に、最高の雄弁が公衆に語る
技術と学知に満ちみちたあらゆる演説でよりも
もっと魅惑されるように。

音楽の発達を雄弁へといたる言葉の発達に、つまりある文化現象を別の文化現象に比較するのである。

5. 知識の進展

諸分野での検討のあと文化の進歩に関する議論に移ると、あらゆる技芸の秘密は物を知ることを欲する人々の実践を通じて知られていき、知識は日々純化し (s'épure) 増加する (s'augmente, v. 434) という指摘がくる。この命題には、先ず例が、次いで象徴的イメージが伴うことになる。

Ainsi les humbles toits de nos premiers ayeux,
Couverts negligemment de joncs & de glayeux,
N'eurent rien de pareil en leur architecture,
A nos riches Palais d'éternelle structure. (v. 435-438)
例えば我らの祖先たちのつましい屋根は
無造作に藺草や菖蒲でおおわれて
永遠の構造をもつ我らの豊かな宮殿に
その建築法において似ても似つかぬものだった。

これまた体制を誇る者の抽象的な議論である。じっさい、宮殿の建築のために働く人々はその住人になるのかという現代人なら問わずにおかない問題について著者は一切語らない。他方バタイユが指摘するように、建築物であることに変わりはないとしても、たとえばヴェルサイユ宮殿は居住という実利を目的とするものではなく、至上の権力を事物化して見せること、「驚嘆させる」ことを目的とする²⁸⁾。目的因の異なるものを同列におくことはできるの

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

か。ともかく、これを範例と判断する理由は、建築物は「文明」の一部を構成するという事実とともに、それらがここで字義どおりの意味をもつからである。そのことは、この作品に言及する人が好んで引用する続く比喩との対比によって更に明らかになるであろう。

6. 櫨の木

Ainsi le jeune chesne en son âge naissant,
Ne peut se comparer au chesne vieillissant,
Qui jettant sur la terre un spacieux ombrage
Avoisine le Ciel de son vaste branchage. (v. 439-442)

こうして生まれた時の櫨の若木は、
広々とした影を大地におとし
枝をひろげて天にもちかづく
年を経た櫨とは段違い。

まず櫨ないし柏は西欧において「逞しさ」とか「勇気」とかの象徴として用いられてきたことを知る必要がある。ところで櫨に付帯する観念はペローによる採用のモチーフではあるにせよ、ここでは微かに残留するにすぎない。成長する文化の象徴という機能が、従って旧・新の比較が前面をしめるからである。そこにはしかし、一見奇妙で誤解されかねないパラドクスがある。若い櫨／年を経た櫨の対比において、古代を喩えるのは後者ではなく前者の方である。逆に近代は老木が表象する。逆説の印象は、新／旧という対比から（「死語」と化した数年前の流行語を用いれば、新人類は若く、旧人類は老いているのだから）不可避免的に由来する印象、つまり古人＝古さ＝老木（古老といった表現を考えよう。フランス語でも《vieux》は老であり古である）、それに対する近代人＝新しさ＝若木という観念連合である。しかしここでは我々の時代において陳腐な二重の三項対比は通用しない。このことは、先に読んだ、泉が大河に成長するように時間の効果は近代の技芸を益するという思想

を思い出すならば容易に納得できるだろう。要するに近代とは、古代以来の知識や技術の「集積」(v. 433)によって成っているのである。それゆえ近代の擁護とは、歴史の否定でもなく伝統との断絶を誇ることもなく、むしろ逆に過去からの蓄積を根拠として歴史や伝統を肯定する考え方なのである。これは、近代についてなされた巨人の肩に乗る小人のイメージに似た隠喩である²⁹⁾。

ちなみに檜は、先に見た泉およびまもなく現れる太陽と共に、『新旧対比』でも、末尾をかざる騎士のソネ——社交的なジャンル——において、ただし帰謬法による転倒した事行のイメージとして再びあらわれることを指摘しておく³⁰⁾。

7. 造化の変わらない生産性

5) や6) に対して予想される反論を論駁する数行を読もう。我々の主題にかかわる事例も出現するが、いささかの迂回が必要になる。というのもそこで《progrez》なる用語が出現するからである。この語の意味を確定しておく必要がある。

Mais c'est peu, dira-t'on, que par un long progresz,
Le Temps de tous les Arts decouvre les secrets,
La Nature affoiblie en ce Siecle où nous sommes,
Ne peut plus enfanter de ces merveilleux hommes. (v. 443-446)

けれども、と人はいうだろう、「時」は長い歩みにつれて全ての
技芸の秘密をあらわにするとしても、それは大したことではなく、
我々のいるこの世紀においては自然は衰弱していて、
もはやかの驚異的な人々を生み出すことはできない、と。

御覧のように《progrez》は擬人化された「時」の歩みを意味しているにすぎない。それは今日のように単独で「文明の進歩」とかもちろん技術工学のそれを意味する語ではない。この語の第二のそして最後の出現はルイ王の称賛において見られる。王の（異端撲滅をふくむ）数々の事蹟を語った後、ペローは書いて

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

ている。

Peut-estre qu'ébloüis par tant d'heureux progresz,
Nous n'en jugeons pas bien pour en estre trop prés. (v. 507-508)

おそらくは、これほどの幸せな進展によって目がくらみ
我々は近すぎるためにそれをよく判断できないのだ。

文脈では《progrez》は「時」についてではなく事柄の変化の方について用いられていて、その限りでは現代の使用法に一步近づいているといえるだろう。しかもそれには「幸せな」という形容詞さえ伴っている。

この詩では無論、更に一般に17世紀のフランス語において、問題の語は特定の何かについて、つまり補語となる名詞を伴う《progrès de...》の連辞において用いられることが多く、それも「進展」とかせいぜい「前進」とかを意味するに過ぎない³¹⁾。しかし、これまでに見たように、また続いて確認するように、作品が文化諸分野における「進歩」を主張していることにはかわりはない。語が後にまとう意味はいくつかの表現によってすでに現れていた。例えば《l'Art qui jamais ne se peut contenter》(v. 255. 決して満足することを知らない技芸)、「そしてこの発明される事物の有益な集積は、日ごとに絶えず純化され増加する」(v. 433-434)があったし、更にペローは、“S'est accruë en nos jours l'humaine connoissance.” (v. 46) (今日では人の知識は増大した)、と歌っているのである。

さて、自然の生産性の問題にもどろう。

A former les esprits comme à former les corps,
La Nature en tout temps fait les mesmes efforts,
Son estre est immuable, & cette force aisée
Dont elle produit tout, ne s'est point épuisée (v. 451-454)

身体を形成するにせよ精神を形成するにせよ、
自然は常に同じ努力をばらう。
その本質は変ることなく、全てを産み出すその

ゆとりある力は涸れてはいない。

De cette mesme main les forces infinies
Produisent en tout temps de semblables genies. (v. 465-466)
同じ手のもつ無限の力は
いつの時代にも相似た才能を産み出す。

ペローの思想を集中的に表現するこの件には若干の注釈をおこなう必要があるだろう。

まず「自然」と訳した大文字の《la Nature》は、ラテン語の《Natura》に源をもつ諸国語の対応語においてもしばしば起ることだが、ここでも多義性を有する。述語として「形成する」(former) および「産出する」(produire) が2回ずつ用いられているように、まずそれは万物を生み出す造物主を意味する。物理的な意味での自然界の総体ではなく、自然界の原理「至上の支配者」(le souverain Maistre. v. 68) の意味である。ところで、これが人間を形成するに際して今も昔も同じ努力をはらうとすれば、生まれる人もまた古今東西、同様の「相似た」ものであるに違いない。人間の「本性」(Nature) もまた普遍的に同じであるだろう。こうして自然界の原理には「人間本性」という意味が分かち難く結びついている。

ところで、自然の不変不易の豊穰性はいかにして語ればよいのか。もちろん造物主が産出する物に証拠を求めざるを得ない。それゆえ引用で省略した10行には、自然界の事物の例がいくつも援用されることになる。太陽(l'Astre du jour. v. 455) はかつてもっと麗しく輝いていたわけではない。薔薇(v. 457)、百合やジャスミン(v. 460) はより鮮やかな色を見せていた訳ではない。鶯(v. 461) とてもっと甘美に歌ってはいなかった。天体(鉱物)、植物そして動物の世界に属する事物の名前は字義通りの意味をもつ範例であって、それぞれの「界」(règne) を代表する。ところで、これら三界が常にその本質において同一であるとすれば、あるいはむしろ同一であるの

と同じように、——ここで、文字表現の沈黙のなかで (Tel も Ainsi も無い) もう一つの類推が暗示される——、人の身体、精神そして才能もまた古今変わることはないという類推である。それゆえペローは作品冒頭で古代人について「彼らも同じ人間だ」と書いたのであった。このレヴェルにおいては自然界に属する事例は、同じくその一部をなす人間本性の隠喩として機能しているのである。

今や我々は、ペローの議論を支える根本的な対比を前にしている。「自然」と「文化」とのそれである。前者は原理的に不変で、テキストは明示的には語らないが現象的に反復を示す³²⁾。そして人間も自然的な存在者である限りでこの範疇に属する。対して、人間の所産である文化は変化し、進展し、増大し、純化する。これはかなり陳腐な識別であり、我々自身の内にもみられる自明の確信であるかもしれない。それは、デリダの言葉を転用すれば、現代すなわち「ルソーの時代」の思考の形だからである³³⁾。けれども、ペローよりほんの20年から30年前のパスカルなどにとっては、「自然」はむしろ主として「超自然」とか「恩寵」や「愛徳」に対立する概念であったことを忘れてはなるまい³⁴⁾。思考を分節する概念の枠組みが変化しているのである。

ペローはしかし、以上見てきた類比の方法に常に従うとは限らない。

不均衡

ルイ王とともに近代の優越を具現するヴェルサイユが話題となる。その宮殿および庭園——都市計画——は、誇張法的隠喩によって一つの都市、更には世界と呼ばれる。

Ce n'est pas un Palais, c'est une Ville entiere,
Superbe en sa grandeur, superbe en sa matiere;
Non, c'est plustost un Monde, où du grand Univers
Se trouvent rassemblez les miracles divers. (v. 293-296)
これは宮殿ではない。大きさにおいて壮麗な、

素材において壮麗な一つの都市そのものである。
否、むしろこれは一つの世界であって、そこには
大宇宙の様々な奇蹟が集められている。

世界の一部でしかないものが世界を、その奇蹟 (*les miracles*) を包含するという「入れ籠構造」である。これに続いて、類推思考の否認をしめす奇妙な文章が現れる。ペローは、ある古代派論客の指摘——古代の庭園を代表するのは伝説にいうアルキノオス王の庭であるように近代のそれを代表するのはヴェルサイユの庭であって、後者は前者に比肩される——を反駁し、古代の庭のホメロスによる記述を要約した後、これを近代の別の事象に喩え直すのである。ここでも《Tel》が先導している。

Tels sont dans les hameaux des prochains environs
Les rustiques jardins de nos bons vigneron. (v. 323-324)
あたかもそれは近郊の小さな部落における
我らの純朴な葡萄作りたちの鄙びた庭である。

古代を代表する庭園が近代を代表するそれに対応しないとする言明である。これは著者自身の思考方法に矛盾する主張ではないであろうか。比例関係を肯定して、その上でヴェルサイユは格別に優れていることを言えば十分ではなかったであろうか。

実際、比較が古代文化のパラディグム間で成されるとはいえ、論理構造に関する限り同一の手法はアリストテレス批判の件において出現していた。ペローは言う。

8. Chacun sait le decri du fameux Aristote,
En Phisique moins seur qu'en Histoire Herodote. (v. 25-26)
高名なアリストテレスの不評は誰でも知っている、
歴史におけるヘロドトスよりも自然学においてもっと不確実な。

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

この指摘は、遅くとも17世紀において幾多の学者たちの経験した戦いや迫害をふまえている³⁵⁾。というより彼らの戦いの後であるが故になされた発言である。アリストテレスの評価は変わりつつあることがわかる。フォントネルも『新旧余談』の中で、『方法叙説』第6部のそれに呼応し増幅する批判を哲学者に浴びせている³⁶⁾。もっとも『ルイ大王の世紀』の著者は、これを正面からではなく、慎重に自然学の面からのみ攻撃している³⁷⁾。ところで、上記の比較文は歴史と自然学との対応、そしてそれぞれを代表するヘロドトスとアリストテレスとの対応を認定し、その上で劣等比較によって後者を前者より確実さにおいて劣ると判定するのである。アルキノオス王とルイ王の庭園もまた同様の議論で処理できたであろう。そもそも文化全体が若い樗と老いつつある樗とで象徴されたのである。

だがペローはあえて比例関係の設定を拒否することによって自己の方法から逸脱する。もし古代の王の庭が近代の農民のそれに匹敵するとしたら、近代の王の庭園に類比をもつものは無くなってしまい、その欠如のために対比も類推による議論も成立しなくなりはずまいか。だがそれこそペローの言わんとするところである。すなわち彼にとって、あたかも「精根を枯らすことのない」(v. 454) 天がその「宝を使い尽くして産み出した」(v. 475) ルイは「最も賢い人にして最も偉大なる王」であるように、ヴェルサイユはあらゆる比較を絶するというに他ならない。これは古今東西唯一無二の傑作なのである。

以上が『ルイ大王の世紀』に見られる「たとえ」ないし「類比」の例である。今や我々はこれらの例の構造を観察し、概念化することを試みなければならない。

(続く)

注 釈

- 1) 学界を対象とした注目すべき出版には、Perrault, *Parallèle des Anciens et des Modernes*, éd. en fac-simile, Préface H. R. Jauss, Munich: Eidos Verlag, 1964 がある。
- 2) Perrault, *Le Siècle de Louis le Grand, Poème*, in *Parallèle des Anciens et des Modernes, en ce qui regarde les arts et les sciences*, T. I (1688), 2^e éd. 1692, pp. 1-25 (Slatkine Reprints, 1977, pp. 79-85). 本稿ではこの版を参照する。
- 3) Cf. J. M. Zarucchi, «L'inimitié Perrault-Boileau et le Corbeau guéri par la Cigogne», in *XVII^e Siècle*, N^o 156, Juillet-Septembre 1987, pp. 283-289 参照。
- 4) Fontenelle, *Digression sur les Anciens et les Modernes* (1688), in *Œuvres Complètes*, Tome II, Coll. C. O. P. L. F., Fayard, 1991, pp. 411-431.
- 5) Cf. N. Cronk, «La querelle du sublime: théories anciennes et modernes du discours poétique», in *D'un siècle à l'autre: Anciens et modernes*, C. M. R. 17, 1987, pp. 9-17.
- 6) これらは戦争術や音楽とともに『対比』第四巻 (1697年) の論点を構成する。
- 7) Péguy, *Clio, Dialogue de l'histoire et de l'âme païenne* (1932), in *Œuvres en prose*, La Pléiade, Gallimard, 1957, pp. 124-130; Grenier, «Remarques sur l'idée de progrès», in *Essai sur l'esprit d'orthodoxie* (1938), Coll. Idées, Gallimard, 1967, pp. 154-167. もちろん両者ともに「進歩」を批判する。なおライプニッツがほぼ同じ時期に「進歩」を提起したという見解 (Jean Delumeau) もある。
- 8) 和解の事情については、ボワロオのペロー宛文書および書簡、アルノーのペロー宛書簡 (*Œuvres Complètes* de Boileau, éd. F. Escal, La Pléiade, Gallimard, 1966, pp. 567-588) およびそれらに関する編者の《Notes》, pp. 1109-1110, 1113、また同書の「年譜」(pp. xxxviii-xxxix) 参照。
- 9) ペローの『対比』第四巻の出版 (n. 6)、Boileau, *Réflexions critiques sur quelques passages du rhéteur Longin, où, par occasion, on répond à quelques objections de Monsieur P*** contre Homère et contre Pindare*, I-IX は和解直前 (1694年) に刊行されていたが、1701年に再版をみる。「近代派」ウダール・ド・ラ・モットに対してラシーヌを弁護する『考察』第 XI は著者の没後1713年の出版。
- 10) 主としてラ・モット (Houdar de la Motte) およびダシエ夫人 (Anne Tanneguy Le Febvre, dame) である。
- 11) 論争の淵源として、ユマニスムおよび対抗改革 (R. Pomeau, *L'Age classique*, III, Arthaud, 1971, p. 73)、デカルト (P. Guth, *Hist. de la littér. fr.*, Tome I, Flammarion, 1981, pp. 308-309; J. Vier, *Hist. de la littér. fr.*, *XVI^e-XVII^e siècles*, Ar. Colin, 2^e éd., imp. 1967, p. 485)、デマレ・ド・サン＝ソルラン (Lanson, *Hist. de la littér. fr.*, Hachette, imp. 1963, p. 596; Gaston Hall, «Le Siècle de Louis le Grand: L'évolution d'une idée» in *D'un siècle à l'autre: Anciens et Modernes*, *op. cit.*, pp. 43-52)、マルブランシュ (R. Zuber et M. Cuénin, *Littér. fr.*, 4 «le Classicisme», Arthaud, 1984, pp. 170-171, 281) らが挙げられている。またパスカルの

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

- 『真空論序文』の先駆的思想表現として「16世紀更には中世」(J. Mesnard, 《Présentation》, *Œuvres Compl. de Pascal*, II, Desclée de Brouwer, 1970, p. 774) も言及される。1667年頃をもって論争は開始されるという指摘 (A. Adam, 《Introduction》 aux *Œuvres Compl. de Boileau*, *op. cit.*, p. xv) もある一方、逆に中世をこえて古代ローマにすら遡るといふ見解もある。論争の系譜を振り返るペロー自身、自分のテーゼは「先ずホラティウスやキケロがその時代に主張した」といふ (《Préface》 du *Parallèle*..., *op. cit.*, Slatkine, p. 11). クルティウスも確かに古代ローマおよび中世について「新旧論争」を語るが、これらの時代の歴史観は近代のそれとは全く異なっていたことに注意を喚起している (Curtius, *La littérature européenne et le moyen âge latin*, trad. J. Bréjoux, P. U. F., 1956, pp. 305-310).
- 12) Condorcet, *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* (l'an V), avec Préface et Notes de M. et F. Hincker, Éd. Sociales, 1971.
- 13) 「私の宗教とは依然として理性のつまり科学の進歩である」(Renan, 《Préface》 de *L'avenir de la science: Pensées de 1848* (1890), 20^e éd., Calmann-Lévy, 1923, p. vii).
- 14) Perrault, *Le Siècle de Louis le Grand*, *op. cit.*, v. 255.
- 15) 作品は、標題を別にして都合6回国王を名指している (v. 6, 294, 472-474, 517) が、いずれも書記法上の特別扱いをしている。
- 16) ジョクールは、韻文においては一行即一段落であると指摘する (《A Linéa》, *Encyclopédie*, T. I, 1751, p. 270 a). ただし12音綴詩で書かれた17世紀の戯曲においては、改行は登場人物が長台詞 (つまり「演説」) を行う時にかなり頻繁に見られる。
- 17) R. Barthes, *Le degré zéro de l'écriture* (1953), *Œuvres Compl.* T. I, Éd. du Seuil, 1993, p. 161.
- 18) デカルトにおける「隠喩」の哲学的意味については J. Derrida, 《La mythologie blanche: la métaphore dans le texte philosophique》(1971), in *Marges de la philosophie*, Éd. de Minuit, 1972, pp. 318-320 参照。パルカルについては個別研究 (M. le Guern, *L'image dans l'œuvre de Pascal* (1969), Klincksieck, 1983) もある。
- 19) Bernard Lamy, *Nouvelles Reflexions sur l'Art Poétique*, A. Pralard, 1678, (Slatkine Reprints, 1973), pp. 201-204. 扉に記載された出版年 M. DC. LXVIII は巻末の「允可状抜粹」によって誤植であることが分かる。
- 20) G. Genette, 《Frontière du récit》, in *Figures II*, Seuil, 1969, pp. 50-56.
- 21) 修辞学の三大部門の訳語は、西周「知説」五 (明治7年) のそれによる。『西周全集』第一巻、崇高書房 (昭和35年)、昭和45年、463-464頁。なお著者は第二の部門に誤って「ジュジシウス」とのルビを振っているが、「レトリック」はいみじくも「文学」と訳している。文の学の意味である。
- 22) Perrault, *Mémoires de ma vie* (1759), reproduction de l'éd. de 1909, précédé d'un essai d'A. Picon: 《Un moderne paradoxal》, Macula, 1993, p. 238.
- 23) アナログアについては中世哲学会編「中世思想研究」XVI (1974) 所収のシンポジウム (pp. 106-130); P. Ricœur, *La métaphore vive*, Seuil, 1975, pp. 344-356 を、い

- わゆる16世紀の「知」については M. Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966, pp. 32-59 参照。
- 24) Malherbe, Regnier, *Maynard, *Gombaud, *Racan, *Voiture, *Tristan, *Godeau, *Corneille, Rotrou, Sarrasin [sic], Moliere. *付きはアカデミー会員。コルネイユ以外はすべて複数の定冠詞および -s を伴っている。なお全て故人である。
- 25) 絵画：《C'est par là que le Brun... Et que dans l'avenir ses ouvrages fameux Seront l'étonnement de nos derniers neveux》(v. 241-244). 彫刻：《Mais que n'en diront point les siecles éloignez, Lors qu'il leur manquera quelque bras, quelque nez?》(v. 271-272). この《non-finito》作品への皮肉には別の皮肉を返すことができよう。ペローが対置するヴェルサイユ宮の「新しい傑作」は、全て古代の寓話を題材にしているからである。
- 26) すでにタキトゥスが民主制の消滅において指摘し (Cf. T. Todorov, *Théories du symbole*, Éd. du Seuil, 1977, pp. 61-64)、また18世紀にはルソーが絶対王制のなかで指摘する、政治演説は体制に左右されるという事情を事実上認めながら、《Que nos grands Orateurs soient assez fortunez / Pour défendre...》(v. 87-88) と書く時、ペローは体制側にある者に特有の抽象的な議論を行っている。
- 27) 因みに象徴派のグールモンは「ヨーロッパ諸言語の現状においては、ほとんどあらゆる語が隠喩である」とさえ書いている (R. de Gourmont, *Esthétique de la langue française* (1899), Mercure de France, 10^e éd., p. 187).
- 28) G. Bataille, *La Part maudite*, III 《La Souveraineté》, in *Œuvres Complètes*, Tome VIII, Gallimard, 1976, pp. 321-322.
- 29) ペローやフォントネルが呼応する類似の先行思想 (ロジャー・ベーコン、フランシス・ベーコン、デカルト) からの抜粋を、パスカルの『真空論序文』に関するブランシュヴィックの注釈 (Pascal, *Pensées et Opuscules* (1897), Hachette, imp. 1968, pp. 80-81) に読むことができる。
- 30) 《Quand le Dieu des saisons aura moins de lumiere / Au milieu de son cours qu'en ouvrant sa carrière; / Qu'un Chesne qui n'a vû que deux ou trois Printemps/Aura plus de rameaux qu'un chesne de cent ans; / Qu'un fleuve roulera plus de flots à sa source/ Qu'il n'en porte à la Mer en achevant sa course; / (...)/ Je croiray qu'en nos jours il n'est rien qui réponde / Aux plus foibles essais de l'enfance du monde.》(*Parallèle ...*, T. IV (1697), 5^e Dialogue, p. 294; Slatkine, p. 357). 因みに帰謬法による議論については、ペローの称賛する『論理学』は「明らかに知性を納得させ得るけれども、それを照らすことはない」と説いている (Arnauld et Nicole, *La logique ou l'art de penser*(1662), 5^e éd. 1683, éd. critique par P. Clair et F. Girbal, P. U. F., p. 328).
- 31) Richelet, *Dictionnaire François* (1680) はこれを《avancement》と言い換える。Furetière, *Dictionnaire Universel* (1690) は《avancement, profit, avantage》と。但し用例の一つ：《Dans ce dernier siecle on a fait de grands progrès dans la Physique》は、『対比』におけるこの語の最初のそれと共に注目に値する。すなわち「自然界の事柄の認識において人々の成した進歩 (progrés) の正確な歴史を、優れた

『ルイ大王の世紀』における比喩 (1)

- 哲学者が我々に与えてくれるのを目の当たりにするとしたら、どれほど喜ばしいことであろうか」(《Préface》, p. 13). すでに啓蒙哲学者を希求する発言である。なお *Nouveau Dictionnaire de l'Académie Française*, T. II (1718), p. 374 の記述参照。
- 32) Cf. Claudel, 《Introduction à un poème sur Dante》, in *Réflexions sur la poésie*, Coll. Idées, Gallimard, 1953 et 1960, pp. 149-150.
- 33) J. Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967, pp. 145-148.
- 34) パスカルの談話をもとにしてニコルの起草したという『貴族の身分に関する三つの論説』(1670)においては自然／制度 (établissement) の対立が顕著に見られる。しかし作品は最終的には「愛徳の王国」への希求を勧告せずにはおかない。
- 35) 一例を上げれば、ラミはそのデカルトへの共鳴、つまりアリストテレスからの離反の故にパリ神学部の審問により講義差し止め処分を受けた (F. Girbal, *Bernard Lamy (1640-1715): Étude Biographique et bibliographique*, P. U. F., 1964, pp. 32-42).
- 36) デカルトは「現在アリストテレスに従う人々」を非難する (*Discours de la méthode*, 6^e Partie, C. O. P. L. F., Fayard, 1987, p. 62) が、フォントネルもこれに呼応して「アリストテレスは真の哲学者を一人として生み出すことは決してなかった」と断ずる (*Digression . . .*, *op. cit.*, p. 430).
- 37) 思惟における方法の重要性を主張する『対比』は、デカルトおよび『ポール・ロワイヤル論理学』をプラトンやアリストテレスにはるかに優ると讃える (*Parallèle . . .*, T. II, 3^e Dialogue (1690), 2^e éd. 1693, pp. 53-68; Slatkine Reprints, pp. 107-111).